

〔特集—独立 50 周年を迎えたマレーシア〕

連盟主導の独立の過程について —研究上の論点の再検討—

鈴木 陽一

マラヤ連邦の独立が連盟——そしてその後身の連盟党——の出現によって加速したことはよく知られている。エスニック間の感情対立が著しく、独立は遠い先に思われた時代、主要なエスニック政党が連立して躍進したことは、独立に向けた大きなブレイクスルーになった。非常事態が続くなか、当初、イギリスは自らが身を引けばマラヤは混乱に陥るであろうなどと独立運動を懸念していたものの、徐々に連盟を独立の受け手と認めるようになり、1957年8月31日、マラヤ連邦はついに独立を達成したのであった。

ただ、それにしても、なぜそのような困難な時期に連盟が形成されたのであろうか——より掘り下げて言えば、その形成期、連盟の主要な政敵はマルチエスニックな政治組織を標榜するマラヤ独立党 IMP: Independence of Malaya Party であったとされるが、なぜに少数派である華僑・華人たちは IMP を支持しなかったのであろうか——。また、連盟主導で独立を果たしたことは後のマレーシアにどのような影響を残したのであろうか。ここでは、最近の研究の問題意識なども踏まえながら、この連盟主導の独立の過程に関する若干の論点について、これまでの研究を再検討したい¹。

KL 市議会議員選挙と MCA 党内政治

よく知られている通り、連盟が出現したのは、1952年2月16日のクアラルンプール市議会議員選挙においてであった。これはマラヤ連邦においては実質的に初めて国政を問う選挙であり、このとき、ダト・オン Dato Onn 率いる IMP は MCA の支持を得て勝利するはずであった²。ところが、MCA スランゴール支部は IMP への支援を嫌い、UMNO クアラルンプール支部と連盟を組んで選挙協力を行った。結果、UMNO-MCA 連盟は 12 議席中 9 席を奪い、大きな勝利を収めたので

¹ 本稿は拙報告ペーパー「帝国戦略のなかのマラヤ脱植民地化」(日本国際政治学会 2002 年度研究大会、2002 年 11 月 15 日)より一部を抜粋し、加筆修正したものである。

² IMP は TCL から華人指導者も加わった種族間連絡委員会 CLC: Communities Liaison Committee 参加者を母体につくられていた。それゆえ、TCL から華人指導者は積極的に IMP 支持に動くことが期待されていた。

ある³。この後、一種の連盟ブームとも言うべき旋風が連邦に巻き起こった。各地で UMNO と MCA が連盟し、ときにほかの政党もこれに加わり、地方議会議員選挙で圧勝を続けていった。

なぜ MCA スランゴール支部はここで UMNO を支援したのか、また MCA 中枢はその後しばらく IMP 支持を通し、連盟には距離を置いていたが、いつ彼らは UMNO との連盟に重きを置くことになったのか、といった諸論点はこうしたなか当然に出てくるものである⁴。そして、これらについては、連盟形成の背景に MCA 内の勢力争いが深く関わっていたことが明らかであったため、従来そうした観点から説明されることが多かった。もとより MCA は植民地政府協力の下に華人たちが結集したものであった。その指導部は、マラヤで生まれ、英語教育を受けた者たちによって運営されていたが、地方支部は英語を話さない華人実業家に支えられ、各地中華商会との混同も起こっていた。特にタン・チェンロック Tan Cheng Lock(以下、父子の区別をするため、TCL と表記する。)とスランゴール州の実力者 H.S.リー H.S. Lee との関係は必ずしもしっくりはしていなかった。TCL はその長いマラヤの政治経歴からその総裁に選出されたものの、強いリーダーシップを発揮することは困難であった。それゆえ、まず H.S.リーが連盟の形成へ独走し、その後それが各地選挙でも既成事実になったため、TCL もこれを追認することになった、という解釈が一番説得力のあるものとされてきた⁵。

出入国管理法改正問題

ただ、このようにことさら人間関係を強調する説明は、連盟の形成が及ぼした政策上のインパクトを見落としかねない、といううらみがあるように思われる。そうした意味で、これらの論点について、これまで主要な研究ではあまり重視されてこなかったが、本来もっと追究すべきは最大の争点であった非マレー人の市民権問題との関連からの説明であるように思われる。この頃、マラヤ連邦政府では出入国管理法改正案(Immigration (Control) Bill)が小委員会で話し合われ、これには多数意見と少数意見の二つが出されていた。多数意見はオンラマレー人委員らに支持され、少数意見は華人委員らに支持されていた。その詳しい内容は不

³ IMP は 2 議席獲得にとどまった。IMP は、インド系住民の支持を受けたものの、マレー人や華人の支持を得ることができず、議席を伸ばすことができなかった。

⁴ 連盟の形成は MCA による IMP 潰しの側面さえあったとさえ言える。華人の多いクアラルンプールにおいて、MCA は他党との選挙協力なしでも相応の勝利を手にする立場にあったが、あえて UMNO に働きかけて連盟の形成を促したのであった。

⁵ Heng Pek Koon, *Chinese Politics in Malaysia: A History of the Malaysian Chinese Association* (Singapore: Oxford University Press, 1988). Oong Hak Ching, *Chinese Politics in Malaya, 1942-55: The Dynamics of British Policy* (Bangi: Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia, 2000), pp.190-195. 金子芳樹『マレーシアの政治とエスニシティ 華人政治と国民統合』晃洋書房、2001年ほか。

明であるが、多数意見は非マレー人にとっては厳しかったようで、運用によってはかなりの数の華人の追放が可能であった。そうしたなか、TCLは依然としてオンとの関係を重視し、IMP支持を打出していた。彼は自身が疑いようもないマラヤ人であったせいも、そうした華人たちが一人前のマラヤ人として認知されること——マラヤに根を張った華人たちがマレー人と共通にして対等の市民権を獲得すること——に関心が偏っていた、とも解し得よう。対して、H.S.リーはオンの支持する出入国管理法改正案を危険視して、その阻止を急務と考えていた。彼は自らの支持基盤に身分の不安定な草の根華僑を多く抱え、こうした問題に敏感であった、と解することもできよう。

クアラルンプール市議会選挙より少し後のことになるが、H.S.リーからTCLにこの問題をめぐって多くの手紙が出されており、その一部はTCLペーパーとして公開されている。丁重な文言なかに、H.S.リーからTCLへの激しい攻勢が読み取れる⁶。3月初めの時点で、H.S.リーはUMNO総裁トUNK・アブドゥル・ラーマンTunku Abdul Rahmanにもこの問題を相談し、ついには市民権について何らかの秘密の言質を引き出し、TCLに報告した模様である⁷。連盟形成の政治は単なる主導権争い以上のものであったと言える。TCL自身もH.S.リーの指摘を重く受止め、友人への手紙で次のように述べている⁸。

オンは多数意見に署名した。これは、彼の基本的な考えはマラヤの華人口を減らそうとすることにある、という考えを確認するものである。

TCLもまた、この問題を契機に、オンへの強い懸念を抱くようになった。すでに3月、彼は、H.S.リーの念押しに応じ、予定されていたIMPマラッカ支部長への就任を見送る旨も明らかにしている⁹。

その後への影響について

⁶ 以下がそれらの手紙である。なかで言及しているものを併せると、2月29日から、3月13日までに、少なくとも都合7通の書簡がH.S.リーから出されている。このほか、「手紙に書けない」こともあったせいも、両者のあいだには電話を通してのやり取りもあった。Letter from H. S. Lee to Tan Cheng Lock, 5 March 1952, 10 March 1952, 12 March 1952, 13 March 1952, Tan Cheng Lock Papers, SP13/A/51, Arkib Negara Malaysia, Kuala Lumpur.

⁷ Letter from H. S. Lee to Tan Cheng Lock, 5 March 1952, Letter from Tan Cheng Lock to H. S. Lee, Tan Cheng Lock Papers, SP13/A/51, Arkib Negara Malaysia, Kuala Lumpur.

⁸ Letter from Tan Cheng Lock to Sir George Maxwell, 10 April 1952, Tan Cheng Lock Papers 3.275, Institute of Southeast Asian Studies(ISEAS), Singapore.

⁹ Letter from Tan Cheng Lock to H. S. Lee, Tan Cheng Lock Papers, SP13/A/51, Arkib Negara Malaysia, Kuala Lumpur.

かなり大きく漠然とした問いであって論点と言えるものではないが、それでは、独立が連盟主導で果たされたことは後のマレーシアにどのような影響を残したのだろうか。もちろん、この漠然とした問いについてはこれまでもいろいろな角度から議論がされてきた。それゆえ、あまり目新しいことなど言えないが、ここではこの問いに関連して、二つほどの論点について私なりの考察を記したい。

まず挙げたいのは、独立が連盟主導でなされたことはマレーシアに寡頭政治、より限定して言えば政府主導の政治過程——諸外国と比べたとき、かなり特徴のある政治過程——をビルトインしたのではないか、という論点である。その形成以来、連盟は少数エリートのあいだの信頼関係の上に成り立っていたが、これは政府主導の政治として制度化されて現在に至っていると捉えられる。1955年、連盟党は初の組閣を行ったが、このとき、初代首席大臣となったトゥンクは閣内に与党有力者を据え、そこで通常の政策調整を行うことにした。そしてその後、独立に伴って本格的な議院内閣制が成立し、そうした政府主導の政治過程は定着していった。

一見、政府主導の政治過程は議院内閣制成立による当然の帰結とも見えるが、比較政治学的に見た場合、与党会派間の政策調整にこれほどまでに内閣が偏重されるのは珍しい、というのが私なりの評価である。もちろん、周知のとおり、与党間の直接折衝が持たれることがあるが、これはエスニック間の問題など限られた範囲の問題についてのみとなっている¹⁰。政府主導——さらに限定して言えば、内閣主導——の政治過程はエスニック政党がエスニック対立を煽ることを封じるため、歴史的に形成されて維持されてきた、と解することができよう。エスニック政党は大衆を煽り、議会を煽ることで、政策の実現を追求しようとする誘惑にかられるが、内閣主導の政治過程が確立している場合においては、そうした煽動の影響は限定されたものとなる¹¹。もちろん、マレーシアの現状の寡頭政治がデモクラシーの観点から本当に望ましいかについては議論が分かれる。ただ、いずれにしろ、マレーシアの政治過程については、こうした歴史的な観点からも、今後もっと研究が深められる必要がある¹²。

¹⁰ 少なくともほかの国においてはもっと議会が政策調整に活用されている。それを鑑みるとマレーシアの陣笠代議士 *backbencher* の発言力はかなり制限されている。

¹¹ 1990年代、遠く離れた地、バルカン半島において民族紛争が激化した。エスニック政党が対立を煽ったことの帰結であった。なお、このとき、マレーシアはこれに平和維持軍を派遣した。もちろん、基本的に、派兵は国際プレゼンスの向上に基づく国威の向上と捉えられるものであった。ただ、当時、私はその国内向け報道などを見ていて、国民が派兵にそれ以上の意味を付与しているように思われた。決して他人ごとではない、という暗黙の懸念が国民に共有されていた、というのが実感である。

¹² 歴代政権がこの政府主導の政治過程にあることは軽視されてはならない。通説と異なるかもしれないが、歴代政権の政権基盤は連盟党の枠組みからの変化で見ると連続性で見た方が分かりやすいように思われる。マハティールが長期政権を維持し、アブドゥラー

第二に挙げたいのは、連盟主導の独立なくば華人の市民権問題についてマレーシア型の解決はあり得なかった、あるいは極めて困難であったのではないか、という昔からの論点である。独立過程、華人の市民権獲得の過程において連盟が果たした役割の重要性はヘン・ペッククーン Heng Pek Koon らによって強調されてきた。確かに、同化政策が進められる傍ら、多数の華人が外国籍あるいは無国籍のまま放置される、そうした状況は東南アジアでは実際にあることである。上に見た当時のオンらの動向も鑑みれば、ムルデカ・コンパクトは連盟主導であったからこそ創り上げることができた、と私にも思われる。連盟主導の独立は華人の帰属意識を先取りし、マレーシア華人というエスニシティの創出に大きな貢献を行ったように思われる。

がそのマハティールからの非難をかわしえたのも、このときにつくられた政府主導の政治過程に基づくところが大きいとも解し得る。